

## 「メディアと日本文化」の授業実践による利点と課題

栗田 聡子

### Practice of “Media and Japanese Culture” — Its Benefits and Challenges

KURITA Satoko

〈Abstract〉

From the academic year of 2015, the Center for International Education & Research of Mie University started to offer a new course called “Media and Japanese culture” to both international students and Japanese undergraduates. The main purposes of the course include, 1) to increase the understanding of the Japanese culture, society, and psychological tendencies through media, 2) to consider characteristics of Japanese culture and social issues (by comparing with those of student's own country), and 3) to encourage intercultural communication through discussions and group presentations.

This report discusses how media related topics and group presentations could be effective in enhancing the understanding of Japanese culture and cross-cultural communication among international and Japanese students. To do so, the course syllabus and results of class evaluations/questionnaire are introduced.

キーワード：メディア、日本文化、国際交流、異文化コミュニケーション

#### 1. はじめに

「留学生 30 万人計画」（文部科学省他，2008）の実現にむけて国内の留学生の数は上昇しており、三重大学においても 2015 年度は 333 名と、2013 年度の 295 人、昨年度の 316 人から年々増加傾向にある。留学生のための授業として、日本社会や文化に関する授業を実施する意義は、少なくとも 3 つあると考えられる。それは、1. 日本文化に興味を持ち留学を決めた留学生の学習意欲にこたえるため 2. 日本理解の促進や国家間の友好的な関係を維持するため（外務省，2015）3. 留学生の将来的雇用に興味を示している企業からの要望にこたえるため（福岡・趙，2013）、である。

欧米に流れる傾向にある優秀な留学生を多く受け入れるためにも、留学生のための授業を充実させて日本の大学の魅力を高めることが必要である。留学生同志だけでなく、日本人学部生とともに学ぶ機会が与えられれば、日本語の習得を助けるだけでなく、交流を通じて実際の日本人や日本社会についてより正確に知ることができる。学部生にとっても、

留学生と学ぶことにより異文化に対する理解が深まり、グローバルな視点を得ることにもつながる。結果的に、大学のグローバル戦略における国際教育という理念にも通じることになるだろう。

三重大学国際交流センターでは、日本語上級レベルに達する留学生と日本人学部生を対象に「日本事情」と称し、「三重の文化と社会」と「留学生とともに学ぶ日本の社会と文化」を開講してきた。学部生への開放授業であることで、日本人学部生と正規留学生は、教養教育の単位が得られる。「三重の文化と社会」は、三重の文化や歴史についての講義と学生による研究発表、実際に三重の名所・旧跡を訪ねるツアーで構成されている。地域の特色を生かした教育は、日本の歴史や文化を理解する上で有効であるばかりでなく、大学と地域との連携を強めるためにも重要であろう。

2013 年度からは、センターの状況により「三重の文化と社会」のみの開講となり、実質的に留学生と日本人学生がともに学べる機会が少なくなっていた。その点も考慮し、2015 年度より「日本事情」の第二授業となる「メディアと日本文化」を開講した。担当教員である著者は 4 月に着任したばかりで、留学生と学部生の割合など予測できない要因が多かったため、1 年目の授業はシラバス作成も含め、実験的な試みとして実施した。本稿では、その授業の概要と実施内容、授業に関するアンケート結果等を紹介し、授業の利点と課題についてまとめながら 2 年目以降の授業の方向性を検討していく場とする。

## 2. 国際教育における「メディア」の有効性

「メディア」とは、広義で様々な意味を持つ。それは、情報を伝える媒体であり、メッセージそのものであり、コミュニケーション手段である。メディアが運ぶメッセージ内容やコミュニケーションの技術的変革が社会や個人にもたらす影響力ははかり知れず、電子メディアが台頭する以前より、メディアは人間社会の話題の中心となっていると言っても過言ではない。次に、留学生と学部生双方にとって、メディアをテーマに授業を実施することで利点となるであろう 4 つの点について考える。

第一に、メディアはその国の文化や社会について理解を深めるための資料になりうる。メディアを映画やテレビ番組など娯楽的側面にとらえた場合、その商業的成功は視聴者の物語に対する感情移入、または登場人物に対して抱く共感、情報に対する興味なしには成立しない。娯楽番組は、その国の文化や国民性を即座に、感覚的にとらえることができる素材とも言える。広告メディアにおいても、ターゲットが属する国や民族の文化、社会的背景等の理解なしでは目的をなし得ない。この点で、娯楽的メディアや広告は、留学生にとって日本文化を学ぶ上で極めて有効な資料であると考えられる。

第二に、他国のメディアは自国の文化や社会について客観的な分析や理解を促すことを可能にする。例えば、日本における言論・表現の自由をテーマにした授業で、近年問題になっている与党によるメディアへの圧力発言やメディアの中立性について取り上げるとする。言論・表現の自由はどのようにして重要なのだろうか、という問いとともに、留学生は、自国においての言論・表現の自由における現状を、日本の現状と比較することで考える機会を与えられる。

第三の利点として、メディアは、留学生と学部生の異文化を超えた人間理解の機会も与えることが挙げられる。日本を選んだ多くの留学生が、日本のポップカルチャー、特にアニメやマンガのファンである。今や、文化差を超えて世界中の人々を惹きつける日本のマンガ・アニメ作品の、どの要因がこの時代に生きる人々と相性が良いのであろうか。メディアは文化や社会について理解を高める機会を与えるだけでなく、ある特定のアニメやストーリー、登場人物について感じることを留学生と学部生が話し合うことで、異文化理解を深めると同時に、異文化を超えた人間同士の交流を可能にする。

最後に、メディアは、影響という観点からも留学生と学部生がともに考える機会を与える。例えば、政治的影響力について言えば、第二次世界大戦中にナチス・ドイツをはじめとし、日本を含む各国で実施されたプロパガンダ政策は、社会学者や心理学者を「メディア影響研究」に駆り立てた。世界的な脅威と化したイスラム国（IS: Islamic State）の拡大は、ソーシャル・メディアを駆使したプロパガンダ戦略によるものであるとは周知の事実である。留学生と学部生で、自国が経験した戦争、政党プロパガンダや選挙広告など政治メディアの戦略や効果などについて共に調べて発表することも可能である。政治以外にも、メディアの影響に関する話題は、ソーシャル・メディアの過剰利用による影響、青少年におけるゲームの影響、ロボットを含むメディアがもたらしえる向社会的影響、なども含むことができる。

このように、メディアを切り口とした授業は政治経済、戦争・紛争からビジネス・娯楽、コミュニケーションにまでおよび、人間社会における大部分の話題を含むことになる。時系的にも、メディアの歴史から現在・未来まで検討すべき話題も多い。メディアの即時性はタイムリーな話題を学生に提供でき、討論できる機会としてプラスと捉えることもできる反面、焦点を置くポイントを見極めずに進めることにより授業の方向性を失う危うさがある。この点を踏まえて実験的に作成したシラバスを次に紹介する。

### 3. 「メディアと日本文化」シラバスについて

#### 3.1. 授業の概要と目的

授業の概要として、「この授業は日本語上級クラスの留学生および日本人学生を対象とし、メディアを通して日本の社会や文化を理解するだけでなく、情報社会に生きる私たちの在り方について皆で考える」とシラバスに記した。授業目的については、「日本のメディア事情から日本の文化と社会、日本人の心理的傾向について考え理解する、2) (自国のメディア事情や文化と比較して) 日本社会の特色や問題について考える、3) ディスカッションを通して国際交流を促進する、4) プレゼンテーションを通して情報を伝える技術を学ぶ、とした。

#### 3.2. 授業の内容について

一回目の授業でアンケートをとり、このクラスで学びたいこと、外部講師による特別授業に対する希望、などについて回答を集めた。その結果も参考にしながら、15 回分の授業を表 1 のような構成で実施することにした。前期・後期における映画と講演者、最近の話題等は異なるが、基本的な同じ構成とした。予想よりも学生の数が多く、最後 4 回分の授業はグループ発表に費やすこととなった。

表 1. 2015 年度「メディアと日本文化」シラバスの内容

回数	授 業 の 内 容
第 1 回	シラバスの説明 / 「メディアと文化について」
第 2 回	グループ作成 / 広告から見える日本①
第 3 回	メディアにおける最近の話題 / 広告から見える日本と自国②
第 4 回	メディアにおける最近の話題 / テレビドラマから見える日本
第 5 回	映画から見える日本 / 映画鑑賞【前半】
第 6 回	映画鑑賞【後半】 / 映画の内容についてディスカッション
第 7 回	メディアにおける最近の話題 / プレゼンテーションについて
第 8 回	外部講師による特別授業
第 9 回	報道から見える日本① / プレゼンテーション準備
第 10 回	報道から見える日本と自国② / プレゼンテーション準備
第 11～14 回	グループ・プレゼンテーション
第 15 回	まとめと授業アンケートの実施

### 3.3. 映画鑑賞について

前期と後期のクラスでは、異なる日本映画を鑑賞することとなったのだが、数多くの日本映画から一作品を選ぶのは容易ではなかった。なぜなら、映画の条件として、日本文化の側面を反映しているのはもちろんのこと、高い評価を受けた映画であること、極度に暴力的な場面などを多く含まないこと、そして多くの学生が映画館またはテレビ放映で鑑賞した映画でないこと、を考慮したからである。さらに、上級レベルの日本語を習得している留学生であっても、彼らが日本語のみで映画の内容をすべて理解するのは困難であると判断したため、英語字幕を含む映画を選ぶ必要があった。これら全ての条件を満たす映画の中から、前期は彫刻家イサム・ノグチの母レオニー・ギルモアの人生に焦点をあてた2010年公開の映画「レオニー」(Leonie)を選び出した。この映画は、「イサム・ノグチ 宿命の越境者」(ドウス昌代著)に感銘を受けた松田久子監督が、非営利団体などのサポートなどにより7年の歳月をかけて完成させた話題作であり、中村獅童や原田三枝子をはじめとした名優が演じている。作家であるイサムを日本人である彼の父(英詩人である野口米次郎)の元で育てるため、アメリカから日本に渡ったレオニーにとって、明治時代の封建的な日本社会での生活は厳しいものであった。レオニーの観点から描かれた「日本」と彼女の心理描写は、留学生にとって感情移入しやすい内容であると推測し、学部生にとっては世界的芸術家であるイサム・ノグチの存在を知り、彼の人生と作品に影響を与えた両親との複雑な関係や「日本」についても考えを巡らすことができる芸術映画であると判断した。近年では欧米でも公開されているが、一般上映されていないため、この映画を観たことのある履修学生は皆無であった。

後期に選んだ映画は、名古屋の東海テレビ放送報道部が制作した問題作『約束 名張毒ぶどう酒事件 死刑囚の生涯』(2013)であった。この作品を選んだ理由は、まず前期と同じ条件を満たしていたことである。数々のドキュメンタリー作品賞を受賞した経歴を持つ記者(斉藤潤一監督)により制作され、仲代達矢・樹木希林をはじめとした名優が演じていることも含めて日本映画として質的に高い作品であると評価した。

後期クラスの雰囲気も映画の選択に関して考慮に入れた。新生入生が大半で、適度な緊張と活気にあふれた前期のクラスと比較して、後期のクラスは同じく1年生が大半でも緊張感が薄れ、留学生以外は自主的に発言する学生は激減していた。そこで、後期は芸術や娯楽作品としての映画よりも、実際に1961年に三重県で起こった犯罪事件を題材としたドキュメンタリーの映画を選択することで、各学生が集中力と問題意識を持って鑑賞できるようにした。後期授業が開始された直後、10月4日に毒ぶどう酒殺人事件の犯人として収監されていた奥西勝死刑囚が89歳で死亡し、各メディアで速報・号外報道としてとり

あげられていた時期でもあった。死刑囚の冤罪を主張している映画を通して、学部生にとっては社会問題に触れるきっかけに、留学生にとっては日本と自国メディアとの比較について考える機会になるのでは、と考えた。



写真 1. 前期『レオニー』(2010)



写真 2. 後期『約束 名張毒ぶどう酒事件 死刑囚の生涯』(2013)

### 3. 4. 特別授業について

前期・後期ともに初回の授業にて、メディア業界に携わる外部講師による特別授業について尋ねたところ、「ぜひ実施してほしい」と希望する学生が多かった。そこで、「メディアと日本文化」に近いテーマで授業を行える外部講師を様々なルートから探した結果、前期は朝日新聞社の編集者で映画評論家の石飛徳樹（のりき）氏に依頼することとなった。ちょうどカンヌ映画祭についての記事を書かれていた時期でもあり、国際的に活躍されている社会人からの観点から学生にお話いただけるようにもお願いした。テーマは、「人気映画から見える日本」で、映画評論家による評価と興行成績（人気）がある程度一致していた昭和時代と、全く一致していない近年の比較と映画業界の事情、小津安二郎監督や北野武監督による日本映画独特の描写の仕方、留学生にもファンが多い『千と千尋の神隠し』のラストシーンの解釈、などについて数々の映像とデータを交えながらお話いただいた。

後期の特別授業では、学生が鑑賞した映画『約束 名張毒ぶどう酒事件 死刑囚の生涯』の監督で東海テレビ放送報道部長の齊藤潤一氏に依頼した。授業では、長年にわたる取材と記者としての執念、映画の制作過程や名優に恵まれた経緯などについての話題を中心に、日本の裁判制度の問題点などについても説明があった。授業の最後に、齊藤氏は「放送の中立性を尊重するニュース報道と異なり、ドキュメンタリーでは覚悟を持って自分たちの主張を表現することも必要である」と日本の報道記者としての気概を語られ、学部生・留学生双方にとって刺激的な授業となった。なお、授業風景は報道部クルーにより撮影され、年末に放送された。

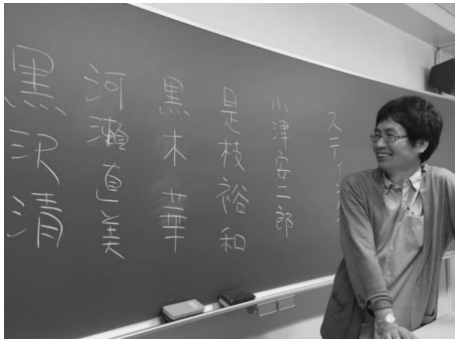


写真 3. 前期 石飛徳樹氏による特別授業



写真 4. 後期 齊藤潤一氏による特別授業

### 3.5. 授業評価について

グループ発表における評価は40%とし、その40%は学生が各自、各グループの発表について評価した結果と教員の評価を各50%として構成した。課題①は、「日本の好きな広告」「自国の文化を反映していると感じる広告」を探して規定のA4用紙に貼り付け、その広告の内容と選択した理由についてグループ内で説明する内容であり、総合評価の10%とした。目的は、学期始めでまだ打ち解けていない留学生と学部生が自国の広告と文化についてメンバーに紹介することで、アイス・ブレイクの機会をもうけることであった。課題②は、映画鑑賞と外部講師による特別授業に対する感想文で、総合評価の30%とした。学部生は、1000語以上、日本語での長文執筆に慣れていない留学生は700語以上とし、彼らの日本語チューターに文法表現をチェックしてもらうよう促した。

## 4. 履修学生

当初、前期の履修学生の数を留学生15名、学部生20名ほどと予測していたが、前期の学部生の数は予測を大幅に超えた50名となった。教養教育の単位が取得できること、履修可能な学生数に制限をかけていなかった事、新入生にとって「メディア」という親しみ

表 2-1. 2015 年度前期 履修学生数（総数 71 名）

学部生 50 名		留学生 21 名	
学年別	1 年生 46 名・2 年生 1 名	所属別	国際交流センター 11 名
	3 年生 2 名・4 年生 1 名		人文聴講 7 名・教育聴講 1 名
学部別	人文学部 22 名・工学部 22 名	出身国	人文学部 1 名・工学部 1 名
	教育学部 4 名		中国 12 名・韓国 4 名・ドイツ 2 名
	生物資源学部 2 名		タイ/ロシア/ハンガリー 各 1 名

表 2-2. 2015 年度後期 履修学生数 (総数 44 名)

学部生名 25 名		留学生 19 名	
学年別	1 年生 22 名・2 年生 1 名	所属別	国際交流センター 9 名
	3 年生 2 名		人文聴講 7 名・教育 1 名
学部別	人文学部 15 名・工学部 8 名		出身国
	生物資源学部 2 名	中国 14 名・インドネシア/ベトナム タイ/イギリス/スウェーデン各 1 名	

やすいテーマが科目名に含まれていた結果であると思われる。表 2-1、2-2. が示すように、前期・後期ともに学部生は 1 年生が大半を占めており、ほとんどの学部生は人文学部と工学部所属であった。留学生の多くは中国出身であり、国際交流センターもしくは人文学部の特別聴講生で構成されていた。

### 5. グループ発表について

クラス全員を前期では 11 グループ、後期では 12 グループに分け、日本人学生と留学生が各グループに均等な人数で構成されるようにした。前期では、1 グループの人数が 7、8 名と多人数となり、発表準備のためのスケジュール調整や意見をまとめることが難しい、との声もあった。そこで、後期では各 3、4 名 (うち留学生 1、2 名) の少人数とした。発表のテーマは、日本のメディア事情についての情報を含めれば基本的に自由とし、内容によっては留学生の出身国のメディア事情などと比較する部分も含め、一方的に発表するだけでなく観客であるクラスメイトとの双方向的なコミュニケーションも加えるよう要望した。各班にリーダーを選んでもらい、発表日まで責任をもってグループを牽引していく役割を与え、発表スライドの最終ページに名前と発表内容の中で担当した部分を明記するように指示した。

前期で発表されたテーマは、「ゴールデン・タイムは何を見る? 日本・中国・韓国」「世界の映画を知ろう!」「日本の文化を PR するテレビ番組」「化粧品 CM における文化比較: 日独中」「日本と中国の年末番組」「SNS の利用状況: 日本 vs. 中国 vs. タイ」「長江、東方之星転覆事故から～日中新聞 TV 報道の比較」「日中メディア比較」「SNS とニュース: 日中比較」「世界のホラー映画」であり、留学生の出身国のメディアと比較する内容で、娯楽番組に関連したテーマが大半であった。学生からの評価が一番高かった班による「日本と中国の年末番組」では、日本の「紅白歌合戦 (NHK)」と中国の「春節晚会 (CCTV)」の内容が紹介され、両番組を比較分析した結果がまとめられた。例えば、「紅白歌合戦」では積極的に流行が取り入れられており、1 年の締めくくりとしての役割も担う番組である一



方、中国の「春節晚会」は、武術など伝統文化の継承をテーマにしており、新年のはじまりとお祝いのイメージを強調している点などが相違点としてあげられた。共通点は視聴率の低迷であり、日中ともに若者のテレビ離れ、趣味の多様化から避けられない現象ではあるとしながらも、SNS やアプリとの連動など視聴率アップのために何ができるか、などの案も提案された。

同じく高得点を得た「世界のホラー映画」は、日本、米、ロシア、中国で制作された恐怖映画の内容を比較検討した発表であり、「恐怖感」という切り口で各国の価値観や心理傾向を比較する面白い内容であった。例えば、日本の「身近だが、見えない霊による恨みの恐怖」、「強い悪魔が勝つ」米の恐怖映画、ホラー映画の制作が少ないロシア、「霊（鬼）は幻であり現実の人間の方が恐ろしい」とのメッセージを込める中国映画、などである。学部生からは、ロシア映画の制作技術の高さと制作本数の多さに驚いたとの感想もあがった。全ての発表内容を本著で紹介することはできないが、類似した発表テーマでも情報や分析結果が重複することなく、それぞれ興味深い内容となっていた。一方で、テーマ範囲が広すぎて焦点が見えにくい発表もあったため、後期ではテーマをできるだけ絞り、リサーチと分析に時間をかけて表面的な紹介に終わらないように指示をした。なお、作業を分けて最後に合わせただけの印象を与えるような発表もあったため、後期では作業を分担しても、お互いに連絡を取り合いながら内容をまとめていくように促した。

後期の発表に関しては、現在の時点で大半の班が準備中であるが、「食べたらどうなる？ Snickers」と題してSnickers（アメリカのチョコレート菓子）の日中におけるテレビCMの内容を比較した発表、アニメやまんがを実写映画化する近年の世界的潮流を紹介した「実写化映画の流行」の発表が既に行われた。Snickersを食べると、CMの人物はどのように変化するだろうか。日本版CMでは、破天荒にあばれる人物（内田裕也）がSnickersを食べることにより元の静かな学生に戻り、機嫌が悪い人物（泉ピンコ）は機嫌が良くな



写真5. 前期 グループ発表の準備と発表風景

る、という設定である。つまり、Snickers は精神安定剤のような存在として日本で宣伝されているのだ。一方、中国版 CM では、三蔵法師や Mr. Bean など一般的に優しい (弱い) 印象のある人物が、Snickers を食べることにより、超人的なパワーを身に付けてはじける、という設置になっている。中国では、Snickers は強壯剤のようなイメージで宣伝されており、ストレス社会の中で強さよりも安らぎを求めると理解されている日本人向けの CM と対照的である。この発表は、一つの商品の広告に絞ることで、グローバルな広告戦略が重要視する国の価値観や文化について拡大鏡で分析できていた良い例であった。表 4 により、前後期で学生が使用した発表スライドの一部を紹介する。

＜グループ発表で紹介されたスライドの一部＞

表 3-1. 前期「日本と中国の年末番組」(6 班) より抜粋



表 3-2. 前期「世界のホラー映画」(11 班) より抜粋



表 3-3. 後期「食べたらどうなる? Snickers」(1 班) より抜粋

<p>食べたらどうなる? スニッカーズ</p> <p>日本語 発表グループ 1 班 人文学部 1 年 山本結平 王座 高野祥 工学部 1 年 門脇寛子</p> 	<p>スニッカーズ 日本版CM ①</p> <p><a href="https://www.youtube.com/watch?v=FgchjadK1VQ">https://www.youtube.com/watch?v=FgchjadK1VQ</a></p> <p>場面：吹奏楽部(すいそうがくぶ)の練習風景</p> <p>内容：お禮がすいて不機嫌な内田裕也が音楽室でめっちゃめっちゃな演奏をするが、仲間からもらったスニッカーズを食べると元の生返に戻る</p> 								
<p>スニッカーズ CMの特徴 (日本)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・クセの強い別人→元の性格・見た目に戻る</li> <li>・集約が激が、日本で有名なタレント</li> <li>・カラオケやボウリングなど日本では馴染なじみ深い遊び場所</li> </ul> <p>CM① 内田裕也 日本でもっとも破天荒なエンタメイメージのロック歌手</p> <p>CM② 栗原ひな 怖いイメージのある演技派女優</p> <p>演技者のイメージでCMの印象を作り出している</p> 	<p>スニッカーズ 中国版CM ①</p> <p><a href="https://www.youtube.com/watch?v=3eT5UjB88PQ">https://www.youtube.com/watch?v=3eT5UjB88PQ</a></p> <p>場面：ドラゴンボートに乗っている</p> <p>内容：お禮がすいた人が分からないイメージの三葉法師(さんそうぼうし)になってしまい役に立たなかったが、スニッカーズを食べることで、元の家に戻りさらに力が湧き上がる。</p> 								
<p>日本と中国の比較まとめ表</p> <p>共通点：スニッカーズを食べると元に戻る 最後のキャッチフレーズ「自分名取り戻せ」</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>中国</th> <th>日本</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>・驚く</li> <li>・動かない</li> <li>・不機嫌</li> <li>・中国で有名なキャラクターと有名な</li> </ul> </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>・不機嫌</li> <li>・動いている</li> <li>・怖い</li> <li>・日本で有名なタレント・俳優</li> </ul> </td> </tr> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>・驚く</li> <li>・しっかりする</li> </ul> </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>・落ちる</li> <li>・音場になる</li> </ul> </td> </tr> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お禮がすいた時</li> </ul> </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お禮がすいたら機嫌が元に戻る</li> </ul> </td> </tr> </tbody> </table>	中国	日本	<ul style="list-style-type: none"> <li>・驚く</li> <li>・動かない</li> <li>・不機嫌</li> <li>・中国で有名なキャラクターと有名な</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不機嫌</li> <li>・動いている</li> <li>・怖い</li> <li>・日本で有名なタレント・俳優</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・驚く</li> <li>・しっかりする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・落ちる</li> <li>・音場になる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お禮がすいた時</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お禮がすいたら機嫌が元に戻る</li> </ul>	<p>ご清聴(せいちょう)ありがとうございました</p> <p>谢谢观赏</p> <p>Thank you for listening</p> 
中国	日本								
<ul style="list-style-type: none"> <li>・驚く</li> <li>・動かない</li> <li>・不機嫌</li> <li>・中国で有名なキャラクターと有名な</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不機嫌</li> <li>・動いている</li> <li>・怖い</li> <li>・日本で有名なタレント・俳優</li> </ul>								
<ul style="list-style-type: none"> <li>・驚く</li> <li>・しっかりする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・落ちる</li> <li>・音場になる</li> </ul>								
<ul style="list-style-type: none"> <li>・お禮がすいた時</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お禮がすいたら機嫌が元に戻る</li> </ul>								

## 6. 感想文の課題について

### 6.1. 2015 年度前期

前期では、映画『レオニー』に対する感想か、映画評論家の石飛徳樹氏(朝日新聞)による特別授業に対する感想、どちらかを選択して 1000 字以上(留学生は 700 字以上)の感想文を提出するように課した。予測どおり『レオニー』の内容に共感した学生の割合は留学生の方が多く、石飛氏の授業内容が言葉の壁で部分的に理解できなかったとの理由もあり、留学生の感想文のほとんどが『レオニー』に対してであった。外国人として日本で生活する自分とレオニーの心情を重ねる感想や、女性としては自由奔放ではあるが、息子であるイサム・ノグチの芸術的才能を早くから認め、張り裂ける思いで渡米させたレオニーに対して偉大な母親像を見た、との内容が多く見られた。学部生では約 4 割が「レオニー」への感想を提出しており、女性に対して封建的な社会であった明治時代の日本やイサム・ノグチの作品に影響したと思われる日本人の父と母レオニーの特殊な関係、自分にはないレオニーの強さと孤独について考えを巡らした内容が目立った。

石飛氏による授業の感想文で多く見られたのは、専門家による映画の評価と興行収入の一致がほとんど見られない近年の映画事情に対しての気づきと驚きである。その他、芸術としての映画を鑑賞する方法について学ぶことができた、との感想も多く含まれていた。以下において、1 年生の男子学生による感想文の一部を参照する。

「(前略) 過去も映画作品の評価は興行収入と相関しない物であったかということ、決して

そうではなく、先に名を上げた黒澤明監督の「七人の侍」などは、評価も収入も双方高いレベルを保つ作品であったそうで、現代の日本とはまた違う映画の世界が過去にあったことがわかりました。恐らくその頃は、商業と芸術がつかず離れずの距離を保っていたのだと感じました。最後の質問で、誰かが「某アイドルユニットがオリコンチャートを独占している」という話をしていたのですが、僕も現在の映画界は似たような状態だと思いました。殆どの国産映画にはネームバリューを売りにした俳優（多くはアイドルやタレント）が出ており、既視感を感じるような仕上がりとなってしまっています。商業的にはきわめて効果的なつくりなのでしょうが、映画の名を冠するには疑問を感じざるを得ません。キャスト重視の映画でも、外国の人が見ても「面白い」と感じられるような面白さの一般性を作品に込めて欲しいと感じました。(中略) 僕にはいまだにいい映画、悪い映画というものはかる物差しが面白さしかありませんが、別の視点を持つ人に会ったことは、今後僕に何か新しいものへの縁へ繋がるかもしれません。恐らく一生ないであろうこの機会を大切にしつつ、以上で感想としたいと思います。」(工学部 1 年 男子学生)

## 6. 2. 2015 年度後期

後期の授業では『約束 名張毒ぶどう酒事件 死刑囚の生涯』を鑑賞し、特別授業にはその映画の監督である斉藤氏を迎えたことから、映画と授業に対する感想を一つの課題とした。映画と授業の内容が完全に一致したことで、留学生にも斉藤氏による授業の内容を理解しやすい結果となった。留学生、学部生ともに多く見られた感想は、裁判制度における不条理や非論理性、怒りの感情である。「疑わしきは被告人の利益に」に反した判決に対する憤り、弁護士団への共感と尊敬、奥西元死刑囚と家族に対しての同情、など表現の差はあれ共通していた。学部生の感想でのみ見られた話題は、映画鑑賞前に授業で触れた「放送の中立性」の問題である。テレビ局の報道部が、奥西元死刑囚の無罪を主張し、「約束」のような映画を制作することは「放送の中立性」に反していて好ましくない、と数名の学生が書いていた。その一方で「この映画は言論の自由を最大限に生かしている」と感じた学生も多かったようである。留学生・学部生ともに洞察力に優れた感想文は多く見られたが、ここでは台湾からの女子留学生による感想文の一部をそのまま抜粋して紹介する。

「司法とは一体何だろうか？私達が今安心して生活できる、この社会はどうやって成り立ったか。其の鍵は信頼できる法律が存在していることといっても言い過ぎではないだろう。この社会に居る人々がある思想や観念を共有し、皆の最大の福祉を求めるために、法律というルールを制定し、管理を司法というシステムに頼んだ。この社会の中に、多数の人が認められない行動は“罪”と呼ばれ、罪を犯す人は犯人と呼ばれて、罰を与えられる。

そのシステムがうまく作動しているお陰で、人々は平和の毎日を過ごせるようになった。しかし、このシステムは完璧という訳ではなく、人間が作ったものだから、人間の様に、時々迷ったり、間違えたりする。この司法というシステムには様ざまなバグが隠れている。

この事件も一つのバグかもしれないと私は思った。私はこの事件もその事件に巻き込まれた人々のことも全然知らなかった。そのため奥西さんの不幸を同情するだけで、「彼はきっと無罪だ！」と叫ぶ事はしないけれど、私にとって、彼が受けた審判は公平だと言えない。決定的な証拠が足りないまま、彼は罪を犯した事実を断言するのはどう考えてもおかしい。十分な証拠が揃う前では、誰も犯罪者として扱われるべきではない。そうしなければ、人々と司法と言うシステムの信頼関係は続くことはない。(中略)

今年、奥西さんは亡くなった。多分、彼の死と共に、真実が明らかになる日はもう来ない。今更、有罪か無罪かは、もう亡くなった人々にとって、意味はないだろう。最期まで彼を信じていた母親と弁護士、そして村の人々も、この事件が残した傷はもうどうやっても治すことはできない。あの悲劇を覚えている人はもうほとんどいなかった。しかし、このドキュメンタリーを通して、私達はこの事件、奥西さんの人生を知った。これはもしかして斉藤さんの一方的な解釈かもしれないが、彼は指摘した疑問点は確かにもう一度考える必要がある。今のところ、再審はただ無実を証明する機会ではなく、司法はまだ信頼できるかを検証する方法として、“司法は何を狙っているのか”と問いたいだけだ。」

## 7. 授業アンケート

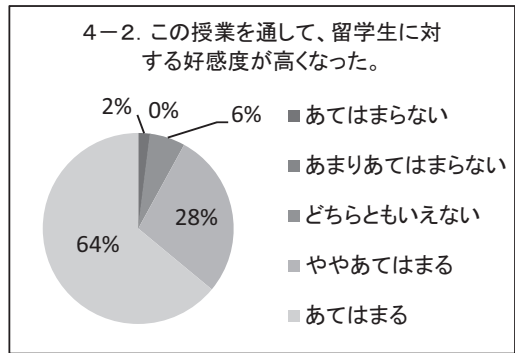
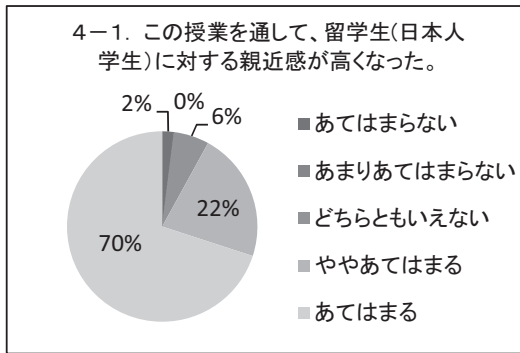
### 7.1. リッカート尺度による回答

教養教育機構により実施された前期分の授業アンケートでは、「学び」について質問している。各質問に対して、学生は「あてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「あてはまる」の5段階のリッカート尺度で回答した。「総合的に判断して、この授業に満足できた」に対して、「ややあてはまる」「あてはまる」で86%、「この授業の内容について理解できた」に対しては82%、「新しい知識・考え方・技術などが獲得できた」には82%、「この授業の受講によって、学業への興味・関心(意欲)が高まった」に70%、「学びを深めるために、調べたり尋ねたりした」には、60%にとどまった。

「感じる力」「考える力」「コミュニケーション力」「生きる力」4つの力を身につけるのに役立ったか、という問に関しては、「コミュニケーション力」が一番高く、「少し」、「ある程度」、「かなり」身につけるのに役立った、と合わせて94%となり、「感じる力」と「生きる力」で各88%、「考える力」に対しては84%となった。上記の質問に加えて、

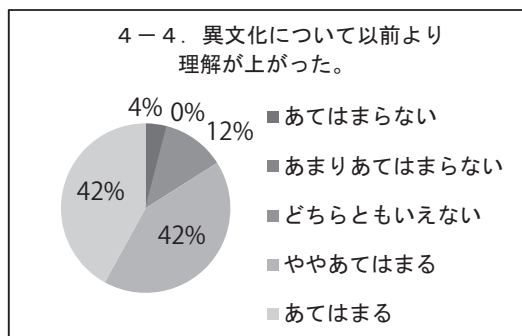
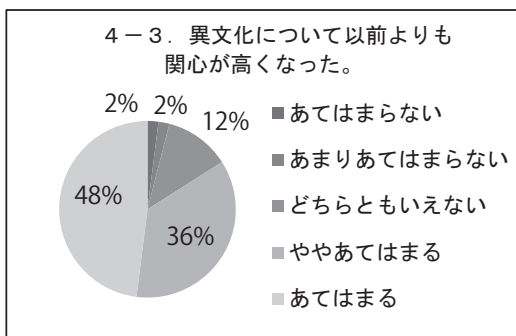
留学生との交流や異文化理解について質問項目を実施したので、回答結果を円グラフ (表 4-1~13) に参照しながら検討していく。

■ 留学生・日本人学生に対しての親近感と好感度について



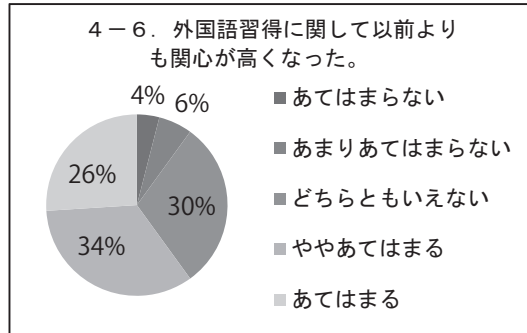
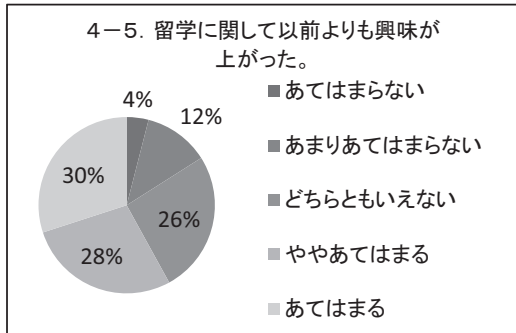
上記の表が示す通り、留学生・日本人学生あわせて 92% の学生が、互いに対する「親近感」「好感」を感じる度合いが高くなったと報告している (「ややあてはまる」と「あてはまる」を合計)。特に、「親近感」に対して「あてはまる」と回答した学生は 70% と高い割合を示していた。なお、「この授業を通して、他学部の学生との交流が増えた。」の項目に関しても、「あてはまる」(38%) 「ややあてはまる」(36%) と高い割合を示していたことも付け加える。

■ 異文化に対する関心と理解について



異文化に対する関心は程度の差はあれ、84% の学生が「高くなった」と感じており、理解度に対して同じ割合の学生が「高くなった」と回答している。

■ 留学と外国語習得について



異文化に対する関心は高まったにもかかわらず、留学や外国語習得に対しての興味や関心に対しては、高くなった（上がった）と考えた学生は約60%にとどまった。留学生はすでに日本に留学している事実を考慮すると、「あてはまる」と答えた留学生の割合は少ないと推測できる。とすれば、日本人学生の中で、留学や外国語習得に対しての興味が高くなった（「あてはまる」「ややあてはまる」）と答えた学生は少なくないであろう。

■ 日本の社会問題に対する理解度と世界の出来事に対する興味について

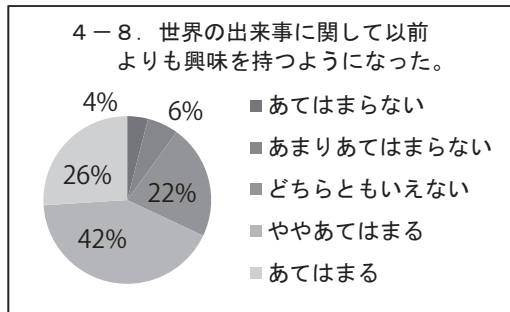
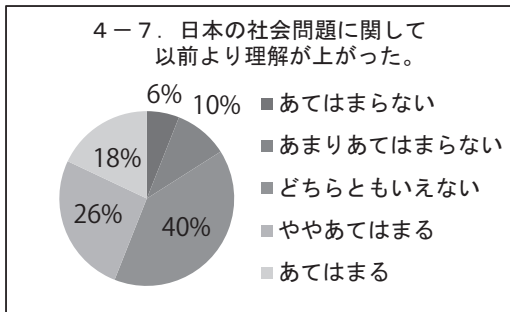


表4-7が示すように、日本の社会問題に関して以前よりも理解度が上がったか、という問に関しては「あてはまる」「ややあてはまる」を合計しても全体の半部以下、という結果になった。講義部分でも、「浅く広く」様々な社会問題の断片を紹介したのみに終わり、グループ発表のテーマにしても、娯楽メディアが中心だったことが理由かと思われる。一方、世界の出来事への興味については、以前よりも持つようになったと答えた学生が68%（「ややあてはまる」「あてはまる」の合計）と過半数を超えた。なお、他の「メディア全般に関して以前よりも興味を持つようになった。」という項目については、「あてはまる」に36%、「ややあてはまる」に34%、合計70%の学生が以前よりも興味を持つようになった、と答えている。

■ グループ発表に対しての精神的負担について

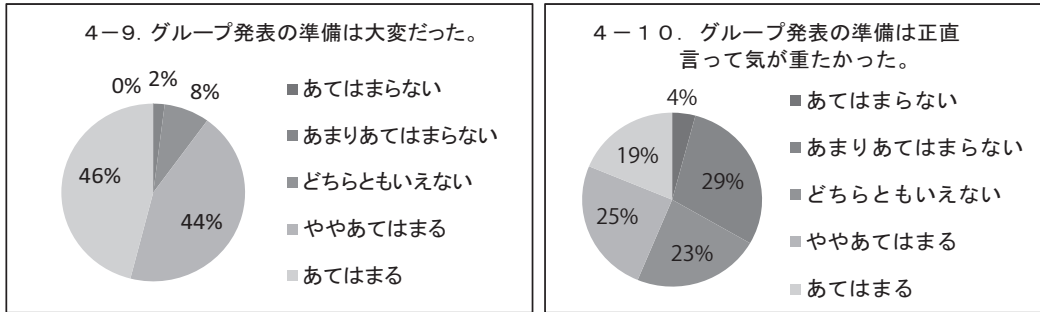
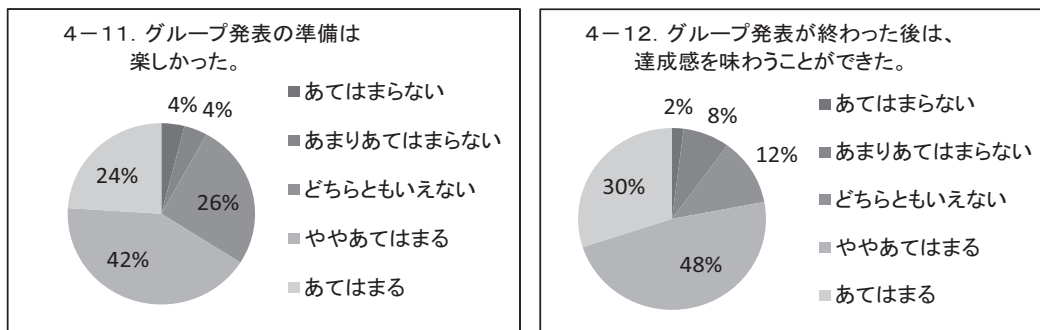


表 4-9. が示すとおり、「大変だった」と思わない学生は、0%であった。90%の学生が、程度の差はあれグループ発表は「大変だった」と回答している。「正直言って気が重かった」という項目に対して、「あてはまる」と答えた学生は 19%、「ややあてはまる」は 25%と減少したが、44%もの学生が負担に感じていたことがわかった。

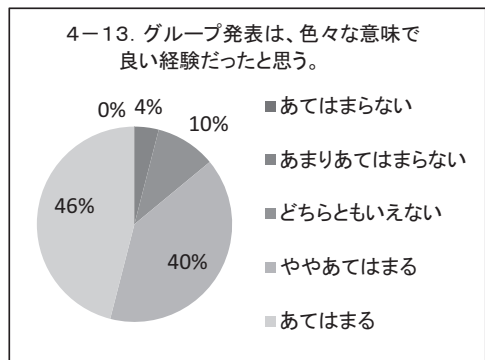
■ グループ発表の楽しさと達成感について



グループ発表を負担に感じていた学生も多かった中で、「準備の過程は楽しかった」と答えている学生は 66%と過半数を超えた (表 4-11.)。「達成感を味わった」学生は、78%に増加していることから、楽しかったわけではなくとも、達成感を感じた学生が多かったことを示している (表 4-12.) (%は「あてはまる」と「ややあてはまる」の合計)

■ 結論：「グループ発表は、色々な意味で良い経験であった」

最後に、グループ発表は「色々な意味で良い経験だった」という項目に対して「あてはまらない」と答えた学生は 0%であり、86%もの学





生が肯定していた。「あてはまる」と回答した学生が最も多い46%であり、他の質問項目と比較しても高い割合を示した。

## 7.2. グループ発表についての感想（自由記述）

7.1.で紹介したリッカート尺度による回答は、教養教育機構が実施したアンケート結果であり、留学生・学部生を区別することはできない。そこで、留学生と学部生がそれぞれグループ発表の経験に関してどのような感想を持っているのかを調べるため、無記名で自由回答を求めた。性別と留学生・学部生の区別は○で囲むことによりわかるようにした。質問文は、「グループ発表の準備と発表に関して、あなたの率直な感想と意見を書いてください。（この授業全般に関してでもかまいません）」とした。

留学生にとって、日本人学生とのグループ発表は、果たしてどのような体験だったのだろうか。英語で回答した2名以外の留学生のほとんどが30文字以上の日本語で記述してくれていた。以下、留学生の記述内容をそのまま抜粋する。

### ■ 留学生の自由記述から

「面白かった。日本人との交流がむずかしいだったが、この機会に日本人といっぱいしゃべれたので満足している。またこの機会があったらうれしいだと思ふ」（男子留学生）

「プレゼンの準備と発表を通して、日本の学生に対する親近感が高くなりました。そして、日本文化や異文化について以前よりも理解度が上がりました。いろいろな意味で良い経験だったと思いました。」（男子留学生）

「楽しかったと思います。日本語で交流し、日本語を習得することもできました。グループで行動して、チームワークということをしみじみ感じました。」（女子留学生）

「色々な意味で勉強になりました。他学部との学生と交流が増えた。準備は大変だったが、発表後、達成感を味わうことができました。」（女子留学生）

「初めて日本人学生とグループになって、一緒にプレゼンテーションの準備と発表ができて、とても勉強になりました。いい経験でした。責任感の強いリーダーさんがいたから、準備も発表も最大限に、完璧にできたと思います。この授業を選んでよかったと思います。」（女子留学生）

“It was really fun”（男子留学生）.

以上のように、留学生にとって学部生との交流は楽しく、全体的にポジティブな経験であったことが書かれており、辛い経験についての記述は見られなかった。

一方で、学部生にとって留学生と組んだグループ発表は、どのような体験だったのだら

うか。大半の学部生は 80 字以上で回答しており、留学生との交流についてポジティブな内容のコメントを書いていた。発表準備の初期段階では、程度の差はあれ多くの学生が苦労を経験したようであるが、次第に楽しさが増し、発表後には達成感を感じた、との回答が目立った。

#### ■ 学部生の自由記述から

「外国人の方とのグループ作業はしたことがなかったので、大変良い経験になりました。時々意思疎通が難しかったりして、どうすれば伝わるか考えられたのでよかったです。」

(女子学部生)

「グループプレゼンテーション準備のために、中国の留学生に質問したり、話をしたりして留学生と交流できて、とても楽しかったです。他の留学生とももっと交流してみたいです！」(女子学生)

「準備はとても大変でしたが、それだけに終わった時の達成感は何の授業とは違ったものがありました。留学生の方々も大変印象の良い方ばかりで、偏見はしょせん偏見であると再認識しました。」(男子学部生)

「時間割が合わない中、がんばって残ったりしてスライドを作った。リーダーがすごくがんばってくれたので、私もがんばれた。留学生も言葉があまり伝わらない中、一生懸命話を聞いてくれた。」(女子学部生)

「情報工学科では、プレゼンを行う機会はないのでプレゼンをする時と聞いた時はとまどったけど、留学生や他学部の人と協力して一つの発表をやり遂げることができたのでよかったです。」(男子学部生)

「準備期間が短かったこともあり、全員で準備をする時間をとるのは難しかったのですが、集まれる日に一緒に準備をするのは楽しかったです。留学生の人に外国について話を聞くのが、毎回楽しみでした。」(女子学部生)

「留学生も日本人学生も、初めは全然知らなかったのですが、一緒にプレゼンを作っても仲良くなりました。達成感もあって、すごく楽しかったです。他の発表を聞くのも、色々なことが知れて、興味深かったです。」(女子学部生)

「留学生と交流することは授業の中でなかなかないので、貴重な経験で楽しかったです。」(女子学部生)

一方で、グループによってはまとまりが悪い、欠席が多い学生が含まれている、などの理由で苦痛を味わった学生も以下のとおり存在していた。

「グループ内での意思疎通が難しく、大ゲンカしてしまった時もありましたが、プレゼン

の内容・パワーポはすごく出来が良く、自己満足しています。」(男子学生)

「準備段階の構成決めが一番きつかった。筋がない、突発的な調査が進められていたせいで、自分が一人で一から内容を構成するのに1週間以上悩まされた。こんな経験は一生に一度あるかないかのことだと思う。」(男子学生)

「頑張って準備をしている人と、そうでない人の差がすごく、とても嫌な気持ちになりました。でも、自分がやらないと話が進まないの、つらいけど頑張ったつもりです。何より良かったと思うのは、留学生の人とたくさん話せたことです。意外な発見が交流を通していくつかあって、見方が少し変わりました。」(女子学生)

回答からもわかるとおり、グループ発表の過程で辛い経験をした学生も、自らの努力によりポジティブな体験として消化できていることがうかがえ、留学生も同じ傾向にあったかと思われる。この点は、5-15の質問項目「グループ発表は、色々な意味で良い経験だったと思う。」に「あてはまる」と回答した学生が46%と、他の項目と比べて高かった傾向に反映されている。

## 8. 1年を振り返って～懸念事項と結果

当初、この授業を実施するにあたり、少なくとも以下4つの懸念事項があった。

- ① 留学生と学部生が果たしてどこまでお互い親近感を持ってグループ発表の準備ができるだろうか。特に、日本人学部生は、日本語が不完全な留学生にどこまで協力してくれるだろうか。
- ② 留学生は日本語上級レベルの試験に合格しているが、果たして教員が普通のスピードで話す日本語とメディアの話題が理解できるだろうか。
- ③ 「メディアと日本文化」というテーマで、留学生・学部生双方にとって興味を持てる話題や素材が提供できるだろうか。
- ④ 焦点が曖昧で、「果たして何を学んだのか思い出せない」と学生が感じてしまうような授業にならないだろうか。

懸念事項①に関しては、アンケート結果が示すように心配する必要はなかった。むしろ、日本人学部生のほうが、留学生との交流を新鮮で楽しいものとして経験したようである。グループ発表で使用したスライド(パワーポイント)の漢字には、教員が特に指示しなくても留学生のためにふりがなが加えられているなど、細やかな配慮が感じられた。実際、アンケートには強調されていなかったが、授業後や立ち話で「日本人学生が優しい」と喜ぶ留学生が多かった。ただ、日本人学生は気を使いすぎてか、留学生が間違った日本語をパワーポイントに書いてもそのままにしておく傾向が気になった。「間違いに気が付いた

ら教えてあげるように」と促したが、なかなか直ることはなかった。

留学生に共通して見られたのは、「自国の文化に対する誇り」であり、「自国の文化を紹介する」ことに対する熱意である。特にこの傾向は中国の留学生から強く感じられた。よく議論にのぼる話だが、日本人は他のアジア諸国に対して優越感を持ちすぎている、と批判されることがある。日本映画が中国や ASEAN 諸国で人気が出ても、一般的に日本人が中国映画や ASEAN 諸国の映画に興味を持つことはほとんどない。実際の授業でも、中国の文化（メディア）を紹介する留学生と観客である学部生との間に多少の温度差は感じられたが、中国年末番組に出演した武道集団のアクロバットの曲芸（動画）に感嘆の声をあげていた学部生も多く、その他の異文化の素晴らしさに触れる良い機会となったであろう。発表する留学生も、紹介する動画などの「適度な尺」の見極めがポイントであることも学んだのではないかと思われる。なお、年末番組を紹介した班は、チームワークの良さも際立っており、クラスメイトによる最高得点を得たことで表彰をした。

懸念事項②に関しても、ほとんど問題はなかった。授業後、留学生にわからない点はなかったか度々聞いていたが、課題の提出方法以外で疑問は特になかったようである。ただ、前述したように、外部講師による特別授業だけは、前知識のない内容や言語が含まれると部分的に理解できないとの報告があったので、今後の検討事項とする。

授業では、メディアで話題になっている出来事や広告、言論の自由、などについて質問をすると、前期では学部生・留学生ともに多くの学生から意見が出た。後期に入ってから、学部生から手が挙がることは激減したが、言語の壁にかかわらず積極的に挙手する留学生に影響されてか、学部生からも手が挙がるようになり、授業の雰囲気は活発化したことは注目に値する。その他、思慮深い留学生が学部生をサポートしている場面もあった。例えば、誰ともコミュニケーションをとらず、無気力的に黙り続ける日本人の男子学生に気を遣いながら、班のムードメーカー的な存在として班をリードしている女子留学生がいた。発表日では、問題の男子学生も一丸となってチームに大きく貢献していたが、彼女の存在なしでやり遂げることは難しかったであろう。ここで紹介できるエピソードには限りがあるが、授業における留学生の存在は、日本人学生にとって良い刺激であったこと、相乗効果により授業が活発化する可能性が高いことを示唆している。

懸念事項③においては、鑑賞する映画、講演者の選択（3.4.と 3.5.参照）も含めてかなり頭を悩ませた。日本の留学生の多くは日本の文化でも、いわゆるポップカルチャー、まんがやアニメ、アイドルグループのファンであることわかっている。その点を意識しながらも、日本でなければ学べない「メディアと日本文化」について、大学レベルで紹介する必要があると考えた。日本人学部生にとっても、話題がタイムリーであることも興味の

度合いに影響する。そこで、紹介する広告もその時期の人気ランキングの中から紹介、テレビドラマでは高視聴率を保持していた『マザー・ゲーム～彼女たちの階級～』（TBS）に関連して日本の貧困問題について、伊勢志摩で公認撤回が要求された海女の萌えキャラクター“碧志摩メグ”問題や、亡くなった水木しげる氏の『ゲゲゲの鬼太郎』と公害問題、などを扱った。政治メディアでは、自民党が作成した集団自衛権を説明するためのまんがを紹介、「報道の自由度ランキング」をもとに自国における言論の自由について考える機会も設けた。しかし、タイムリーな話題を提供するために準備時間が足りない傾向にあったことは、今後の課題とする。

懸念事項④について学生から指摘されることはなかったが、教員自身は改善すべき点が多いと考えている。前後期ともに、メディアという範囲が広すぎたことで授業としての核や焦点がなかった。事実、学生のアンケート結果でも、「授業により日本の社会問題について理解が上がった」という項目に対して「上がった」と答えている学生は少ない（表4-7参照）。今後は、例えば前期はメディアでも比較的軽い話題、エンターテインメントに焦点を置き、後期は報道やドキュメンタリーを通して言論の自由や紛争・戦争問題、などについて考える、など区別して授業の方向性を明確にすることも検討していきたい。

ただ、話題を言論の自由や政治メディアにした場合、一つの壁が存在することが授業を通じて判明した。特に、中国留学生の多くは自国に対する世界からの評価について敏感である。昨年からの報道によると、中国共産党によるメディアや情報のコントロールが一層厳しくなっているらしいが、そのような話題に対して学部生が中国人留学生に質問しても、彼らがその事実を肯定することはなかった。中国で起こった長江、東方之星転覆事故について日中の報道内容を比較したグループ発表においても、中国における報道は日本と大きく変わることはなく、事実に忠実であったと報告されていた。この件に関しては、事実なのかもしれないが、「情報の規制はなく、ネットの検閲もされていない」と一人の中国留学生が主張した時などは、多くの日本人学生の心の中は多少の疑問符を抱えていたとも思われる。ロシアの留学生を例にあげれば、発表で「ロシアにはホラー映画が少ない」と語るだけでなく、「社会的リアリズムに即した映画のみ政府から制作許可が出されていたため、ホラー映画が禁止されてきたから」、などと事情を加えることができれば発表内容も深みを増すだろう。しかし、学部生からの質問は尊重するとしても、留学生の気持ちを考慮すれば、教員から政治的な質問をすることは避けるべきと判断した。

## 9. おわりに

本稿では、2015年度より「留学生と学部生がともに学ぶ」場として開講した授業「メ

ディアと日本文化」の概要と実践内容、学生による授業アンケート等を紹介しながら、授業の改善点や今後の方向性について検討した。

教員個人にとっては、話題の選択を含めてかなり頭を悩ませる授業であり、2 年目もまだ多くの課題を残すだろうと予測している。そんな中で、留学生と日本人学生との交流が予想以上に上手く行われている状況に非常に安堵している。留学生の存在なしでは、グループ発表や講義での活気も確実に減退していたであろう。なお、留学生に対する政治的な話題の配慮と学部生に対する配慮のバランスについては、今後検討すべき課題としたい。

インターネットはネットワークと情報に革命をもたらしたが、その一方で興味のある情報だけで自分をとり囲むような環境をつくるとも言われている。伊勢志摩サミットにも難民問題にもそれほど興味を示さない傾向は、多くの学部生と留学生に共通しており、国際教育以前に「無関心」の問題について教育機関は考える必要があるかもしれない。

1932 年に交わされたアインシュタインと心理学者フロイトの往復書簡 (中山, 1980) の中で、アインシュタインはフロイトに問う。「人間を戦争の脅威から救い出す方法はないものか？」フロイトは、「人間のあいだに感情的な絆を作りだすものは何でも、戦争を防ぐ役割を果たすはずである」と答えている。加えて、「文化の発展がもたらすものは全て戦争を防ぐ」とも語っている。それが正しいとすれば、SNS の発展と相対的に激減している Face to Face での対話が問題視されている現代において、「メディアと日本文化」のような授業 (媒体を必要としない現実の場) で留学生と日本人学生がつながることは、意義があると言えよう。今後も、日本人学生と留学生との個人レベルの交流が、どのように個人の意識に影響し、大学の国際化に貢献できるかについて検討していきたい。

#### <参考文献>

外務省 (2015) 「日本、そして世界の平和と安全と繁栄のために」

(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000101499.pdf>)

ジークムント・フロイト (2008). 「人はなぜ戦争をするのか」 (中山元・訳) 光文社古典新訳文庫.

福岡昌子・趙康英 (2013). 「グローバル人材育成と企業の留学生雇用に関する研究」『三重大学国際交流センター紀要』第 15 (8) 号、19-38.

文部科学省 他 (2008) 「留学生 30 万人計画」骨子, 2008 年 7 月 29 日

([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/07/08080109.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.htm))